

# 武者修行

鹿島賢治

若い頃の思い出は、人それぞれ数多くあるものです。

いまだに、この年になっても時々、夢に見ることが私にはあります。大学時代のインドシナ旅行です。

1967年、当時、左翼系の学生が毎日の様に『ベトナム戦争反対！』を叫んでいましたが、見てきたようなアジテーションに腹を立てた私は『自分の目で確かめて来る！！』と啖呵を切ってしまったのです。さあ大変です。授業料をバイトで稼いで納付している状況で、旅行の費用などあるはずも有りません。しかも当時の為替は、固定相場制(1ドル=360円)で、しかも外貨持出しは500ドルが上限で、とても長期間旅行することは難しい状況でした。

しかし、一旦、人に約束して出来ませんでしたでは、話になりませんし、知らない国を旅してみたいという願望は、日増しに強くなり、かくして『武者修行』を実践することになったわけです。それからというもの建設現場の日雇い(所謂ドカチン)、夜は家庭教師(毎晩2~3本立て)、遂に半年間で約100万円貯めることが出来ました。

かくして横浜の大棧橋からフランス郵船『ラオス号』に乗り、10日間の船旅は始まりました。15,000トンの大きな貨客船で、横浜からフランスのマルセイユ港の定期航路(現在は廃航)で、当時、日本からヨーロッパへ最も安い運賃で行ける路線でした。

バンコクまでの船上生活は、世界を旅する若者の“社交場”で、若者たちが体験してきた“情報”が満載でした。

香港-台湾-フィリピン-タイ(ここまでは船旅)-ラオス-マレーシア-シンガポール(ここからは空路)-カンボジア-再び香港-日本と八ヶ国を約半年掛けた『武者(無茶)修行』で一人旅は続けました。

当時、ベトナム戦争以外、アジア各地は不穏な所ばかりで、治安の良い所は稀でした。タイ北部ではアヘンの密売が横行し、更に山賊が出没すると噂され、ラオスは異母兄弟3人が右派、左派、中立に別れて内戦中でした。

かてて加えて、自然界は野生の象、虎、蛇、大トカゲ、あらゆる風土病を運んでくる蚊の大群などなど、一時も気の休まる時はありません。ところが気の休まる場所が一つ所だけありました。寺院の寄宿舍です。インドシナ諸国は殆どの国が仏教国で国民皆僧制をとっており、どこの町にもこの種の寄宿舍があり、しかも宿泊料を取られることはありませんでした。ここだけは、山賊も、兵士も、野生動物も襲ってくることはありません(但し蚊以外は)。約半年間の旅行でホテルの宿泊は、数日間だけでした。どこの村に行っても、日本人を見るのは初めてのようで、反日的でないところでは歓迎されました。私にとっては、毎日が新鮮で見るもの聞くもの全てが新しい体験と充実した日々でしたが、大変恐ろしい経験もしました。

タイ北部の国境の町ノンカイ(終着駅)に鉄道で着いた時のことです。同じ列車に乗っていた人々は、駅の改札と反対方向に走り出したではありませんか。人々が走り出した先には、大河メコン川が流れています。人々は小さな渡し舟に乗り込む

ために走り出したわけです。私も釣られて舟に乗り込みました。メコン川はタイとラオスの国境線として二つの国を分けており、対岸はラオスの首都ビエンチャンです。無事対岸を渡り、古都ルアンプラバンまで旅をし、再びタイのノンカイに戻ってきました。

事件がここで起こりました。船着場から駅のホームに向かおうとした時です。ライフル銃を構えた迷彩服を着た兵士 3 人に、私は取り囲まれました。兵士 3 人は友好的とは程遠い形相で、何かを叫びながら銃をこちらに向けています。引き金を今にも引きそうな剣幕でしたので、私も命運尽きたかと瞬間死を意識しました。なにせ内戦中のラオスで、いくつもの兵士のムクロを見てきた直後です。私も何かわめきましたが通じるはずがありません。咄嗟の判断で、私は彼らに背中を見せました。実は出発前に何かの役に立つと、母がリュックに“日の丸”を縫い付けてくれていたのです。“日の丸”を見せれば、ゲリラでもなければ、アヘンの売人でもないことを分かってくれると思ったのかも知れません。兵士 3 人はやっとな銃口を下に向け、多分、日の丸がどこの国旗か、そして私が何人かを相談しはじめたのだと、その時思いました。後で分かったことですが、彼らは国境警備隊員でした。連れて行かれた先は、入国管理事務所。そうです私は密出国、密入国の二重の罪で逮捕され、往復 20 バーツの罰金を支払い、釈放されました。(現地の人々は、簡単な通行証でメコンを行き来できるのだそうです。)

インドシナ旅行のあいだ、いくつかの歴史的遺跡を訪ねることが出来たが、やはり圧巻は『アンコール・ワット、アンコール・トム遺跡群』です。シンガポールからカンボジアの首都プノンベンに空路で入りました。

アンコール・ワットは、カンボジア北西部にある大湖トンレサップのほとりに位置する。十二世紀頃、クメール王朝全盛期に壮大な寺院と都を時の王様が造った。都と寺院は現タイのシャム族の攻勢にあい、ジリジリと都を南に移動させ現在のプノンベンにまで後退するのですが、このアンコール・ワットの素晴らしさは、寺院の回廊一面に描かれたレリーフ(浮彫)や寺院全体の幾何学的なバランスが驚くばかりの緻密であるばかりでなく、運ばれた石の量は、あのエジプトのピラミッドに匹敵するというから驚かされる。熱帯雨林のジャングルの中に、良くもこんなに立派な、芸術的な寺院を造ったものだと感心させられました。

ところがである。もっと驚くことがあった。江戸初期(今から 400 年前)に日本人がこの寺院を参拝しているのだ。

『南の国にインドの祇園精舎の寺院がある』という噂を聞いた、肥州(現在の長崎県)松浦藩の森本右近太夫もりもとこうこんだゆうという侍が脱藩してこのジャングルに埋もれた寺院を訪ねているのだ。アンコール・ワットの第一回廊と十字回廊の柱に参詣した時に印した記念碑が当時残っていた。「残っていた」と過去形で書いた理由は、私が訪ねた時には、間違いなく記念碑は残っていたが、その後、ポルポト政権時代にこの記念碑は無残にも削り取られてしまったのだ。実に惜しいものを失ったものだ。

インドシナのジャングルは、実に広大な面積を持っている。カンボジアは国土の全域がこのジャングルにおおわれ、しかも一辺が 2 キロメートル四方のアンコール・ワットのような遺跡が、ジャングルのあちこちに点在している。

『インドシナの奇蹟』とも言われている造形美豊かなアンコール・ワットの寺院を思い出すと、私は、カンボジアの人民の不幸な歴史に思いを致さざるを得ない。古代からインド、シャム、ビルマの侵略を受け、王朝は生まれては消え、消えては生まれる

繰り返してあった。侵略が終わった僅かな期間の王朝時代に、立派な寺院を造って来たようである。

どの遺跡もそうであるように壮大なものを創ると、必ず国力が衰えて国が滅びる。

アンコール・ワットをあとにし、再び空路、次の目的地に向かった。機長が観光客へのサービスなのか、アンコール・ワット寺院の上空を旋回してくれた。その時だった、あのジャングルの中の苔むした、地上では漆黒色の寺院が、何と朝日にあたって『黄金色』に輝いて見えたのだった。まばゆいばかりのその光景は、まるでこの世のものとは思えない光輝く、神々の荘厳な神殿のように見え、目に見えない何か、私の旅を意義あるものに演出し、祝福してくれているかの如くであった。



アンコールワットの回廊の柱の落書き

